

序章 男性と男性性を問い直す

第一部・侍の遺産

第1章 鉄砲のジェンダー——日本近世における技術と身分

第2章 名と誉れ——一七世紀商人の覚悟

第3章 日本国家における武士道とジェンダー化された身体——サムライ志願者への檄文

第4章 ヒロイズムの後に——真の兵士は死ななければならぬのか？

第二部・周縁の男たち

第5章 衰退してゆく労働組合員——戦後労働運動における階級とジェンダー

第6章 サラリーマンはどこへ行った？——「電車男」に見る男性性・マゾヒズム・テクノモビリティ

第7章 日本の都市路上に散った男らしさ——ホームレス男性にとつての自立の意味

第三部・身体と境界

第8章 壁を登る——日本のスポーツ・サブカルチャーにおける覇権的男性性の解体

第9章 男として不適格？——二〇世紀初頭の日本における徴兵制・男性性・半陰陽

第10章 恋愛革命——アニメ、マスキュリニティ、未来

第11章 ロボットのジェンダー——日本におけるポストヒューマン伝統主義



9784750337456



1920036038008

ISBN978-4-7503-3745-6

C0036 ¥3800E

定価(本体3,800円+税)

2013年1月25日

日本人の「男らしさ」

サムライからオタクまで
「男性性」の変遷を追う

サビーネ・フリューシュトゥック
アン・ウオルソール 編著
長野ひろ子 監訳

明石書店

日本人の

Recreating Japanese Men

サムライからオタクまで
「男性性」の変遷を追う

「男らしさ」

サビーネ・フリューシュトゥック／アン・ウオルソール 編著
長野ひろ子 監訳 内田雅克／長野麻紀子／栗倉大輔 訳

明石書店

日本の読者の皆さまへ ☆サビーネ・フリーシュトゥック、アン・ウォルソール 003
序章 男性と男性性を問い直す ☆サビーネ・フリーシュトゥック、アン・ウォルソール 008

第Ⅰ部 侍の遺産

- 第1章 鉄砲のジェンダー——日本近世における技術と身分 ☆アン・ウォルソール 034
- 第2章 名と替れ——一七世紀商人の覚悟 ☆ルーク・ロバート 059
- 第3章 日本国家における武士道とジェンダー化された身体——サムライ志願者への檄文 ☆ミッシェル・メイソン 081
- 第4章 ヒロイズムの後に——真の兵士は死ななければならないのか？ ☆サビーネ・フリーシュトゥック 106

第Ⅱ部 周縁の男たち

- 第5章 衰退していく労働組合員——戦後労働運動における階級とジェンダー ☆クリストファー・ガーティス 130
- 第6章 サラリーマンはどこへ行った？——『電車男』に見る男性性・マソヒズム・テクノモビリティ ☆スーザン・ネイピア 150

第7章 日本の都市路上に散った男らしさ——ホームレス男性にとつての自立の意味 ☆トム・ギル 175

第Ⅲ部 身体と境界

- 第8章 壁を登る——日本のスポーツサブカルチャーにおける覇権的男性性の解体 ☆ウォルフラム・マンツェンライター 204
- 第9章 男として不資格？——二〇世紀初頭の日本における徴兵制・男性性・半陰陽 ☆テレサ・A・アルゴン 228
- 第10章 恋愛革命——アニメ、マスキュリニティ、未来 ☆イアン・コンドリール 251
- 第11章 ロボットのジェンダー——日本におけるポストヒューマン伝統主義 ☆ジェニファー・ロバートソン 277

監訳者あとがき ☆長野ひろ子 304

てしまっている。娯楽版『電車男』では、政治的に物議を醸し出す要素は削られている。

- (6) 女性のオタクももちろん存在しており、日本の資料からすると、その数は増加してきている。ドラマでは、2ちゃんねるの女性メンバーが、折々に電車を支えたり励ましたりする重要な役割を果たす。だが全体としては、現時点(二〇〇八年)でのオタクは主に男性として特徴付けられるであろう。なぜ男性ジェンダーに分化しているのかについての理由は、今後解明の余地があるところだが、おそらくごく初期のコンピュータやインターネット、ビデオゲームのユーザーのほとんどが男性であったことと関係しているのではないだろうか。
- (7) Yoda 2000, p. 653.
- (8) Miller 2004, p. 52.
- (9) オタクと移行対象の関わりについてのさらなる議論は、私が二〇〇八年に発表した論稿を参照されたい。
- (10) Allison 2006.

[参考文献]

- Allison, Anne. 2006. *Millennial Monsters: Japanese Toys and the Millennial Imagination*. Berkeley: University of California Press.
- Bukatman, Scott. 1993. *Terminal Identity: The Virtual Subject in Post-Modern Science Fiction*. Durham: Duke University Press.
- Kinsella, Sharon. 1995. "Cuties in Japan." In *Women, Media, and Consumption in Japan*, ed. Lise Skov and Brian Moeran, 220-54. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Miller, Laura. 2002. "Male Beauty Work in Japan." In *Men and Masculinities in Contemporary Japan*. See Roberson and Suzuki 2002.
- Napiet, Susan. 2008. "Lost in Transition: Train Men and Dolls in Millennial Japan." *Mechademia* 3: 205-10.
- Prindle, Tamae. 1998. "A Cosooned Identity: Japanese Girls Films: Nobuniko Oobayashi's Chizuko's Younger Sister and Jun Ishikawa's Tsugumi." *Post Script* 15, no. 1: 24-36.
- Roberson, James E., and Suzuki Nobue, eds. 2002. *Men and Masculinities in Contemporary Japan: Dislocating the Salaryman Doxa*. London: Routledge.
- Winnicott, H. D. 2006. *Playing and Reality*. New York: Routledge.
- Yoda Tomoko. 2000. "A Roadmap to Millennial Japan." *South Atlantic Quarterly* 99, no. 4: 629-68.

(長野麻紀子訳)

第7章

日本の都市路上に散った男らしさ

——ホームレス男性にとつての自立の意味

Failed Manhood on the Streets of Urban Japan: The Meanings of Self-Reliance for Homeless Men

トム・ギル

Tom Gill

巷で見かけるホームレスを通して、日本人が最も疑問に思うのは、「日本にはなぜホームレスがいるのか?」ということと、「なぜほとんどが男性なのか?」という二点についてである。筆者はこのシンプルな問いに答えることで、現代の日本におけるホームレスと男性性の双方の理解に有益な方向性を指し示すことができると考える。

しかし最初の問いは見かけほど単純ではない。そもそも日本国憲法第二五条には「全て国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」と明記されており、一九五二年の生活保護法はそれを保証するものである。ホームレス問題に関して、政府はこういった従来の福祉政策において対応済みであるとして、長年新たな対応を拒んできた。第二の問いは一般に視覚的観察に基づいているが、ホームレス女性の一部が、ホームレス男性が集まる居住地域に近づかないことで、人目につきにくいという可能性を忘れてはいけない。それでも、多くのデータが、住居あるいはシェルターに暮らしていない人という狭義のホームレスのうち、九五パーセント以上が男性であると示唆している。女性より男性の方がホームレスになる可能性が高いというのは、いわゆる先進国で一般的ではあるものの、日本ほどその比率が著しく不均衡な国は他にはない。

とはいえ、上記の二つの質問は密接に関連しているといえよう。生活保護は小さなアパートの家賃と最低限の生活費を賄うよう設計されている。路上、公園、河川敷で暮らす人々は、生活保護を受給していないと考えていい。その理由には三つの可能性がある。すなわち、①あえて生活保護を申請していない、②申請が却下された、③一度認可された後にその資格を失った。当事者の大半が男性であることから、ここでの分析は必然的に日本人男性の福祉制度との関係性への考察へと向かうのである。

日本において住む場所を失うという危機に陥った場合、男性に比べ女性のほうが圧倒的に国からの支援を受けることが多い。女性には生活保護の他に、片親家庭（母子家庭）とされることが多いがに支給されるもの（児童扶養手当や遺児手当）、DV（家庭内暴力）の被害者の保護という、ほぼ女性向けに設置された二種類の福祉制度が存在する。ホームレス支援施設へやってくる女性がきわめて少ない理由の一つとして、住む場所を失った女性の多くがこれらの福祉カテゴリーのいずれかの施設に救われているということが考えられる。だがおそらくより決定的なのは、日本では今日に至っても家族形態の核となるのは母親と子どもであると考えられている点であろう。両親が離婚した場合、子どもたちはたいていの場合母親に引き取られ、その母は離婚した父親からの扶助料よりも大きな支援を国から受けることとなる。生活保護を運営する担当者の大半は男性公務員であり、彼らは困っている女性、特に子どもとともに暮らしていくことが困難な母親に対して家父長的温情を示す傾向がある。その一方で困っている男性を、大酒飲みかギャンブラー、さもなければ無責任な人物と見なす傾向がある。裁判所で子どもの親権についての議論となれば、通常は母親が有利であり、日本の離婚法では訪問権が確立していないために、父親は子どもに会うことすら難しい状況に陥ることもある。性差別のある社会では、どちらの性に属していようと、承認された役割から逸脱しようとする者が不利益を被るようになっていく。それには自分の子どもを養育したいと考える父親も含まれている。しかし、日本の法律は離婚扶養料や育児費用を男性側に強制する効力が著しく低いために、裁判所は別の方法によって父親と家族を引き離す傾向がある。つまり、仮に父親が母子ときっぱり縁を切れれば、世間の目を逃れ、支払いを避けることは比較的容易なのである。したがって、物理的な利益、法体系そして家父長的文化の三つが、男性（夫）をその妻および家族から引き離す傾向がある。

すなわち日本におけるホームレスの主流が男性だという現象は、ジェンダー化された個人の自主性から由来するものであり、これは二つの方法で表現されると思われる。第一に、深い性差別に根ざした福祉イデオロギーは、経済的自立が維持できなくなった男性を不利な立場に追いやる一方で、自立することをそもそも期待されていない女性と子どもを路上生活から守る。第二に、ホームレス男性側の自立への関心は、「男らしさ」という概念に立脚しているということである。

最近「自立」という言葉は福祉の領域で頻りに登場する。二〇〇二年、新たに制定されたホームレス自立支援法や、二〇〇五年に制定された障害者自立支援法に顕著である。自立は「自立性」「自主性」「主体性」という頻りに使われる表現群の一部であり、自らの「運命」に対する個人のコントロールという課題に関連して用いられる。私がここで論じる自立とは、家父長制社会、すなわち女性の自立を期待することも奨励することもない社会においてジェンダー化された用語である。地方自治体や中央政府の役人は、ホームレス男性を自立に導ける存在とみなしたいのだが、彼らはそれぞれ違った方法で自立を定義し、それをどのように達成するのかにおいても独自の見解を持っているように思われる。

まずは自立についての考えの地域的な差の事例を見てみよう。東京都の「路上生活者緊急一時保護センター」大田寮では、一日に「マイルドセブン」一箱が男性一人ずつに与えられる。ここのスタッフによると、利用する男性の多くは喫煙者で、もし彼らにタバコがなかったなら、彼らはタバコの吸い殻を集めに通りを探し回らなくてはならず、そこそこが彼らの自尊心を傷つけるということであった。「マイルドセブン」は一箱四〇〇円（当時）でサラリーマンが愛する煙草の主要ブランドの一つである。横浜のホームレス自立支援施設「はまかせ」では、「わかば」という名のタバコが一日、一人につき一〇本ずつ与えられる。これはマイルドセブンよりも質は劣るが、値段が一箱一九〇円（当時）で、それ以上のものを求める余裕のない人々が吸っている。男性の喫煙習慣を支援する必要性をまだ認めているとはいえ、彼らに正規雇用の人々と同じブランドのタバコを丸ごと一箱与えて甘やかしてはいけないという発想である。大阪の自立支援センター西成では、居住者にタバコは与えない。代わりに彼らは、毎日一五分間建物内を整理整頓するという労働の対価として数百円を受け取るのである。この賃金で、彼らはロビーにある自動販売機で好きなブランドの二〇本入

りのタバコを購入できる。ここでも男性の自立を維持することの重要性が強調されているが、この場合、タバコの吸い殻を探し回らなければならないということより、ただで何かを手に入れることができるということが疑問視されているのである。

それにしても、欧米のホームレス施設ではタバコという有害物を配給すること自体論外であり、こうした習慣があるのは、日本の施設が良く言えば体の健康より心の健康を大事にしている、悪く言えば居住者の健康より「男性性」を重視している、という国レベルの違いも見られる。

このように、日本のホームレス政策の現状では、公務員やソーシャルワーカーのホームレスを路上生活から脱却させるための効果的な方法を探る取り組みの裏に、個人の「自立」とは何かという知的模索もうかがえる。これらの取り組みの過程において、新しいイデオロギーの範疇が現れつつあるように見える。かつて人々は二種類に分かれていた。①仕事や財産を持ち、自ら生活できる自立した人。②自立していない人、たとえば夫の所得に依存する主婦、親の所得に依存する子ども、あるいは仮にそうした人がいない場合でも生活保護を受けて国家に依存する人。今回新たに「自立支援」を強調することで、自立していかないがいくらか支援を受ければ自立できる可能性がある人という、新しい中間的なカテゴリーが創出された。これを、ホームレスを生産的な生活に引き戻すことにより、福祉依存の文化の発生を避ける試みとして評価するか、あるいはより懐疑的に、ホームレスに生活保護を受けさせない一方で、一連の安い仮の施設に置き去りにすることでコストを削減し、問題の解決を先延ばしにする対症療法とみなすか。このどちらの考え方も、福祉制度を担当する公務員の頭の中にあると思われる。しかし本章ではホームレス自体に焦点を当て、日本人のホームレス男性が「自立」するホームレス男性をどう概念化しているかみてみたい。

アメリカの「シカゴ・プロジェクト」の貧困層の黒人男性に関する研究において、アルフォード・ヤングは、対象となる人たちが持つ視点や信念を無視し、その代わりに「都市部の貧困という外的な力に対し、極端に受け身になるか、あるいは過剰に攻撃的な反応を示すかのどちらかとして、恐ろしいまでに単純化された男性像」しか描写しない研究者の傾向を批判している。日本の社会周縁の男性を調査する研究者もまた、受け身の犠牲者か活発な応答者のいずれかと

して彼らを描写するという誘惑に直面する。しかし、最近書かれた二つの主要な研究は、この二つのステレオタイプを避けることに成功している。青木秀夫は社会の底辺にいる男性が極端に難しい外的環境に直面しながらも、間に合わせの生活をうまく繋ぎ合わせる存在として描写している。筆者自身の印象はこれとほぼ一致する。ただし日本の社会経済的環境は、青木の説より幾分ましではないか。日本という国家は一種の抑圧的な寛容さを示し、一概に社会の底辺にいる男性を批判したり見捨てたりするのではなく、ときには主流となる規範に従うよう努力する男性を評価してきたと思う。一方、長谷川美貴は東京都新宿区のホームレス男性による当局への抵抗に焦点を絞り、そこではホームレス男性自身と、彼らの抵抗への支援や、時としては運動を乗っ取ることもある活動家との間の複雑な関係を強調している。

青木と長谷川は共に、ホームレス男性と日本という国家の関係に対して、大変有益な洞察をもたらしたといえよう。しかしながら、これらの研究のいずれもが、男性個人と直接接触していない。本章では直接接触しての考察を初めて試みた。ここでは、それぞれがユニークで、日本社会の周縁で生活しながら、「自立」の概念化を独自に試みている五人のホームレス男性を事例として取りあげる。これら五人の男性が、今日の日本に存在する数千のホームレス男性の「代表者」であると主張することはできないので、単にこういう男性もいるというだけである。彼らは日本各地の都市部に住んでおり、それぞれが異なる生活状況を経験している。筆者のささやかな試みとは、今日、周縁に生きている日本人男性によって営まれる生活の多様性を映し出すことである。

オガワさん——缶の収集人

東京と横浜の中間に位置する川崎市では、二〇〇七年の夏にアルミニウム屑の値段が一キログラム当たり一八五円という前代未聞の高価格に値上がりした。原因は中国の急速な経済成長による需要の急増、地元の著しい需要、そして金属廃棄物の取引業者間の価格競争にあった。愛生寮というホームレスの保護施設の居住者は、缶集めによってそれなりの収入を得ていたが、その中の一人であるオガワさんが、その仕事ぶりを見学させてくれた。我々は午前六時に古市場

という幸区の地域へと向かった。その日は、古市場の金属廃棄物収集日であった。午前六時半には、その地域を自転車で行き交う十数人のホームレス男性が、我々と缶集めを競いあつた。オガワさんによると、この競争は激しいが、礼儀に沿つたものである。たとえば、人が収集した空き缶を一時的に歩道に置いて、ライバルがそれを盗むことはないし、他の人が既にいる集積場へ強引に割り込むこともない。

この日の朝、我々はビールの空き缶が捨てられる大きな集積場をいくつか見つけ、すぐに空き缶一三キログラムと鍋など二キログラムを収集することができた。我々はその一山を地元の廃棄物回収業者に二八〇〇円で売り渡した。このような日には、オガワさんはたつた二、三時間で、最低賃金（川崎では当時時給七二〇円）以上の収入を得ることができた。我々はすぐ近くのコンビニに行き、先ほどの収入の一部で酒を購入し、富士見公園の木の下で横になりながらゆつくりとそれを楽しんだ。

オガワさんは缶集めを基盤とした生活は不安定なものだと語っている。アルミニウムの価格がいつ暴落するかは誰にもわからない（実際に金属廃棄物の価格は二〇〇八年秋の世界的な経済危機以降、およそ五〇パーセント急落し、ホームレスのライフスタイルに深刻な影響を与えた）。一方、高価格のときはそれを狙う人々が増え、競争が激しくなる。最近ホームレスだけでなく、地域の自治会や廃棄物回収業者も、空き缶の争奪戦を繰り広げている。さらに地元自治体の中には廃棄物の集積場を施設したり、市の回収担当者以外の者が廃棄物を持つていくことを違法にする動きもあつた。隣の横浜市では、そのような条例がある。かつてがらくたとみなされていたものが、今では価値ある資源として多くの人に認識されている。

缶集めは明らかに一時的な生存の一助にすぎず、正規の職業選択ではない。ホームレス男性が結果を予測できない、個人の戦略と戦術を必要とする経済活動である。だからギャンブルが好きで魅力がある。オガワさんはまさにギャンブラーである。彼は丈夫でがっしりした男性で、日焼けした肌をしている。歯はともひどい状態である。一九四〇年に広島県と島根県の県境に生まれたという。彼は二〇年以上横浜の波止場を管理する公社で働いていたが、職場環境はとても良く、ほとんど仕事をしなくても給料は良かったという。彼は再婚しているが、最初の結婚は何十年も前、

一〇代の時で、いわば若気の至りであつた。子どもはできなかったという。二人目の妻は鬱病の女性で、結婚生活は辛せではなかつた。彼は、彼女に対してひどい扱いをしていたことを認めている。「私は一度も休日に妻と外出しなかつた。食事にさえほとんど連れて行かなかつた。私は持ち金をすべてギャンブルに使つた」とオガワさんは語っている。

オガワさんは競輪とパチンコにのめり込んでいた。彼によると、愛生寮の住人のほとんどが、彼と同じギャンブルの問題を抱えていた。町のだ真ん中に競輪場と競馬場がある川崎市は、一般的な都市よりもギャンブル好きが集まるのがその一つの理由かもしれない。しかし、オガワさんの見解では、競輪・競馬よりパチンコ・パチスロの方がよりたちが悪い。その理由として、レースは一日の特定の時間にだけ行われるけれども、パチスロ店は常に開店していて、そこではお金がより早く手元から消え去つてしまうからである。彼は、仕事を失つてから彼のものを去つていった自分の妻を非難する立場にはないという。彼は自分に責任があつたと考えている。彼女は現在神戸で親族と一緒に暮らしている。彼は数年間彼女に電話していないという。筆者はオガワさんに、なぜそうした自滅に陥るようなことをしたのかと尋ねたが、彼は三つの理由を持ち出した。仕事が暇であつたこと、ギャンブル施設に簡単に行けること、そして最大の要因は退屈な結婚生活であつた。

六五歳を過ぎているオガワさんは、年齢的には生活保護を受ける資格を有しているのだが、彼はまだ申請していなかった。彼が言うには、このことはプライドや信念の問題などではなく、現実的な理由、すなわち未払いの借金の返済が無効になる時期を待ち続けているためであるという。仮に彼が生活保護を申請したならば、彼は住民票を作る必要があり、作つた途端債権者に所在がばれてしまう。もし生活保護が認められれば、彼は月収のほとんどを返済金として債権者に渡す羽目になる。今のところ、缶集めでわずかな収入を得ること、社会の片隅で自立できない生活をする、そして役所の世話にならないことが、彼にとつては具合がいいのである。信用取引制度のもとでは、五年間督促状が送られてこない場合に借金は時効となると言つていた。そして、その時効まで一年ちよつと残つていた。時効になったら彼は生活保護の申請をしようとしていた。

彼のようにホームレス男性は現実的な理由から生活保護を受けない場合が多いようである。法的な問題を抱えるか、

あるいはまだ六〇歳未満で、福祉関係の役人によつて一方的に追い返されると思っているかのどちらかの理由で、彼らは待ち続けるのである。これらの現実的な問題から申請をしないという視点は、しばしば福祉に関する議論の中で見落とされがちである。ホームレスが生活保護を受けていない理由に関しては、①プライドが高いために申請をしない、②偏った考えの役人に申請を断られる、という二極化したイデオロギーのモデルで説明されがちである。

日本の行政当局にとつて、ホームレス男性による缶集めという現象は、大変扱いにくい課題である。一見すると、それは歓迎されるべきもののように思える。ホームレス男性は、物乞いをせず、福祉にも依存せず、自転車に乗り経済活動をしているのである。しかし、実際には缶集めは問題行動として見られている。その理由として、まずは稼いだ金の多くが酒やギャンブルといった非生産的なものに費やされてしまうと見られがちである。要するに、缶集めで作った小金ではホームレス男性のライフスタイルを改善することはできない。できるのは今までの酒とギャンブルのホームレス・ライフスタイルを維持することだけである。そして、酒やギャンブルで遊ぶ金が手に入れば、人生を改善するプレッシャーをあまり感じない。それを当局は容認できないのである。次に、缶集めは、日雇い労働と同じように規則正しい労働を必要としない、御都合主義的な不定期の経済活動であり、規範となる中流のライフスタイルに合わないものである。この二つの理由により、缶集めは多くの福祉の専門家によつてホームレスから抜け出すための最初の一步というよりも、むしろホームレス状態と失業からの脱却の障害とみなされ、多くのホームレス施設で禁止されている。

ホトケ——公園生活者の抵抗

名古屋には、自身をユーモラスに「ホトケ」と名乗る地元で有名なホームレスがいる。年齢はゼロ歳で出身地は地球だという。自分の本名や他の個人的な情報を明かさない主義である。ホトケは「自立」の鑑である。筆者が初めてホトケに会ったのは、ホームレス自立支援法が成立した二〇〇二年であった。当時、名古屋市の中心にある三つの大きな公園、若宮大通公園、白川公園、そして久屋公園には、合わせて一〇〇〇人あまりものホームレス男性が住んでいた。ホ

トケは白川公園で大きな日よけが付いた掘っ立て小屋に、たくさんさんの家具、がらくた、本に囲まれて暮らしていた。名古屋市当局は、若宮大通公園にホームレスのための施設を建設中で、市の職員たちは、公園内のホームレスの手作り住居を巡回しながら、その所有者たちに施設が出来上がった際には、小屋やテントを出てその施設に入るように説得を試みていた。皮肉なことに、小屋やテントを持つていなかった人はその施設の利用を認められていなかった。政策の目的は、公園からホームレスの手作り住居を排除することであるのは明らかであった。

ホトケははつきりと退去することを拒否した。二年後に名古屋市当局と警察が若宮大通公園の残留者に対して強制排除を行ったとき、彼はそこにまだ住んでいたわずか八人の男性のうちの一人であった。その際にホトケの住居は壊され公園から撤去されてしまったが、ホトケはそれでも公園から出ていくことを拒んでいた。他の男性たちが施設や病院に向かう一方で、ホトケは釈迦がやったように一本の木の下での生活をしていった。

彼の抵抗のワンマンショーは、二〇〇五年六月三日まで、六カ月もの間続いた。その日二人の名古屋市の職員がホトケの料理中に訪問した際、興奮したホトケは、発作的に彼らに味噌汁を投げつけた。聞いたところによると、ホトケはその二人の職員に対する脅迫と傷害で逮捕された。名古屋地方裁判所での裁判では、例のごとくホトケは自分の本名、年齢、あるいは誕生日を言うことを拒んだ。結果として保釈が認められず、裁判中の一七カ月もの間、勾留の身で過ごすなければならなかった。ついに彼は有罪判決を受け、罰金三〇万円を宣告されたが、これは二カ月分の禁錮に換算されるので、すでにそれ以上の期間を服役していたホトケは自由の身となった。彼は判決を不服として名古屋高等裁判所に控訴し、二〇〇七年の九月に訴えの一部が認められ、罰金は三〇万円から二〇万円へと減額された。裁判の審理は、ホトケの友人や支援者で法廷が必ず満員になっていたという。

ホトケは、自立という我々のテーマにとつて大変興味深い事例である。彼はほとんどの男性があきらめた後も、長期にわたり行政当局への抵抗を一人で続けたのだ。しかし、彼の自立性は完全ではない。彼は地元の日雇労働組合や裕福な個人に支援を受けていたし、病気になる、生活保護の医療扶助費を時折利用していた。このように名古屋市からも多少援助を受けることがあったのに、自分の住所を書くとき、「名古屋市」の代わりに「弱者いじめの市」と書く。

二〇〇七年に、ホトケは巧みにデザインされた車輪付き可動小屋に住んでいた。警察からここに住んではいけないと言われると、可動小屋を数十メートル動かすことにしていた。彼の説明によると、その可動小屋はマキグチさんによって作られた。マキグチさんは大阪出身の元日雇い労働者で、名古屋に移ってこうした小屋を二〇ほど作り、それらをホームレスに貸し出していた。またマキグチさんは若宮公園の水道から水をくみ出すことをそのホームレスに認めるよう市当局と交渉を重ね、勝ちとった。マキグチさんは個人の賢明さと粘り強さで、名古屋市当局とホームレスとの間の関係のなかで第三の勢力になっていた。彼は興味深いもう一つの自立のイメージである。

ツジモトさん——武庫川での「森の生活」

日本のホームレス男性には自分のことを、「怠け者」と分類する人々がいる。ツジモトさんはその一人であった。彼は大阪の近くの西宮と尼崎の境の武庫川の河川敷にある、丈夫でしつかりと建てられた掘っ立て小屋に住んでいた。ツジモトさんは一九四四年に埼玉県に生まれ、筆者が彼と知り合ったときには六三歳であり、およそ一〇年間、武庫川の西宮側で生活していたが、それ以前は何年も日本中を歩き回っていたという。彼の体格はほっそりとしていて、眼鏡をかけたその顔にはしわが刻まれ、微笑んだり笑ったりすると、時折それがくつきりと浮き出してくる。

河川敷でのライフスタイルは、平和と静けさを探し求めるホームレス男性には最適である。公園の生活と比較すると、川辺の住居は撤去されにくく、居住者たちは警察や市の役人によつて悩まされることもほとんどない。市の公園と比べ河川敷には通行人がほとんどいないし、河川敷は行政の担当が市や県や国に分割される複雑な構造であるため、行政上の麻痺とホームレス居住区の放置という結果につながるのである。ツジモトさんが住む武庫川あたりは、二つの地方都市に近く、また近くの電車の駅は大阪へのアクセスに便利であり、したがって田舎よりも郊外と呼ぶにふさわしく、利便性と相対的な静けさを兼ね備えている。しかし河川敷が辺鄙で行政に放置されていることは、ここを平和的な場所にすると同時に、問題ももたらす。喧嘩が起こるとき、あるいは若者たちがホームレス男性を襲うとき、危険な場所にな

る。また洪水の危険もある。二〇〇七年の夏に、台風で堤防が決壊した多摩川からヘリコプターで二八人のホームレスがやつと救助された事件はそれを物語る。

ツジモトさんは、粗大ゴミが出される日には隣近所を歩き回り、宝石類や良質の陶磁器、その他貴重品を見つけるのに成功することもあった。それでも彼は、自分の平均月収を一万五〇〇〇円から二万円ほどと見積もっている。ツジモトさんは電気工や何種類もの建設機械の技師など、数多くの技術関連の資格、それにそろばん二級の免許や、華道と茶道の免許状を持っているという。彼のこぎれいでさっぱりした小屋は、いくぶん茶室を思い起こさせ、そして訪問客と話す際に彼は正座をする。仕事に就くのは簡単だと言っていて、実際仕事の依頼人が何度か彼のもとを訪れていた。しかしメルヴィルが描いたバートルビーBeetleのごとく、ツジモトさんは働くことを礼儀正しく拒む。「資格や技能があるので、仕事ができなければならない。でもやる気はない。気を使うこと、上下の人間関係などに疲れた。ここに来たら、気が楽」

ツジモトさんのライフスタイルは快適そうに見えた。歴史小説を読んだり、仲間と将棋を指したり、ゲームボーイで遊んだりといった趣味の時間を持っている。彼は車のバッテリーで動く小型テレビを持っていて、友人が定期的にはバッテリーを充電していた。彼は石油ランプで明かりをつけ、キャンプ用のガスコンロで料理を作る。すぐ近くにはおよそ一〇人のホームレス男性が住んでいた。彼が言うには、彼らとは仲がよいが、食事を分けることはないという。ツジモトさんにとっては、それは親密すぎる友情を表すものである。ホームレス作家である大山史朗Shiroを含む多くのホームレス男性のように、ツジモトさんは、義務への懸念から親密な友情を慎重に避ける。彼は自転車自転車で釣りの旅に遠出することもある。彼は武庫川の魚は釣る価値がないと言う。ツジモトさんは、武庫川の河川敷にある一五〇から二〇〇戸の住居の中には、三組の男女のカップルと一組の同性愛の男性カップルがいたことに言及しつつ、自身は女性にはまったく興味がないようであった。

オガワさんと同じように、ツジモトさんはいわゆるルンペン・プロレタリアートとはまったくかけ離れた仕事をしてきた。七人兄弟の末子であった彼は、高校卒業後に、印刷機を管理・修理する会社に勤めることになった。彼は自分の

放浪癖を、この専門職が必要とした頻繁な出張に由来するものとしている。彼は五年後に仕事をやめ、その後は職を転々とした。彼は自分が持つ電気工の資格のおかげで十分な給料を稼ぐことができた。あるメンテナンズ会社が、変電所の安全証明書に彼の名前を載せることを承諾することだけで毎月一万円を彼に払ってくれる時期さえあった。「変電所はまず故障しないの、形だけで大丈夫だ」と言う。このように簡単に金を稼げるという時期があったことは、ツジモトさんとオガワさんのもう一つの重要な共通点である。

オガワさんは、自分が生活保護を申請するまでは、現実的な理由から時間が過ぎるのを待っていると述べていたが、ツジモトさんは生活保護を一度も申請したことがなく、これからするつもりもないと強く主張した。なぜ申請しないのかを尋ねたところ、彼は「私はもう生きたくない」からと答え、自殺も三度試みたことがあったと付け加えた。生きたくないから「生活」を「保護」してもらわないといけないと言う。地元のボランティアが、徐々に年をとり体も衰えてきた彼に生活保護の申請を勧めたとき、アパートに入居するくらいなら、今すぐにも入水するか、さもなければ木にロープをかけ首を吊ると彼は言い張った。この話が出たとき我々が座っていたのは、彼が自殺すると主張したまさにその木の下であった。彼は上機嫌で笑ってはいたけれども、人生にうんざりして、「憎性」だけで生きていると吐露した。彼の自殺話がどれくらい真剣なのか、分からない。生活保護と同様に大阪近辺の自立支援センターを利用することにも関心がなく、彼が蔑視する政治家たちによって設立されたどんな施設も信用しない方針だった。

ツジモトさんは日本のソローに見えなくもない。ソローと似ているように彼は田舎から一定の距離を取りつつ、自立生活を維持しながら現代社会を冷めた目で見ていたのである。ただし、ツジモトさんは現金経済から離れようとする理想主義者ではない。農作業よりもスーパーでのごみ漁りから得た金を使うのを好む。ホームレス男性が野菜を育てたりニワトリを飼ったりしているのを筆者はほとんど目撃したことがない。日本では公の場で農業をするには法的な障害があるのは確かである。

ヨシダさん——社会への毒づき

名古屋の庄内川沿いに大きなホームレス共同体がある。筆者はそこで、新太鼓橋の下の歩道のそばにある小さな掘っ立て小屋に住んでいるヨシダさんと出会った(図7-1)。そこから歩道をへだてた反対側、二〇メートル離れたところには、悪臭を放つ大量のがらくたに囲まれた掘っ立て小屋がさらに四つあった。その二つは無人であることがはつきりしており、中のがらくたの圧力で壁が膨らんでいて小屋は潰れる寸前だった。

ヨシダさんは四〇歳くらいに見えた。彼はがっちりして太り気味であり、無精髭と波打った黒髪を生やし、黒い短パンと汗で汚れたグレーのTシャツを着ていた。初めのうちは私に対して疑念を抱いていたようだが、だんだんと饒舌になり、何時間も話し込むようになった。近くにある悪臭を放っているがらくたの山は、ヨシダさんやその友人による暴力に脅えて出た行ったホームレス男性の財産であったと話した。地元の役人たちは、そのがらくたを回収するつもりであると再三言ったが、後回しにしていた。ヨシダさんにとってはこれは、日本の政府機関の役人の呆れた無能力と偽善を露呈するものであった。

別な河川敷に暮らしていたツジモトさんはこの世に対する無気力な倦怠感を見せたが、ヨシダさんの世界観はもつと暗く皮肉に満ちたものであった。「日本はもう終わりだ」と彼は何回も口にした。彼はさまざま陰謀説を持っていた。たとえば、競馬など国営のギャンブルはすべて前もって結果が決められていて、総選挙もそうである。熱い語りの合間に彼は眉毛



図7-1 名古屋市庄内川にあるヨシダさんの掘っ立て小屋からの眺め

を上げ、肩をすくめて退屈そうに「それでしよう？」と物事がわかつていような人間の雰囲気で言い放った。彼には、すべてがとてもしつきりしているように見えた。日本は金持ちが金持ちのために動かす社会であり、総じて墮落し、きわめて不公平な社会である。日本社会は軍隊のように下層階級の者が無力で、上流階級はすべてを管理していると言う。彼は経験から、雇い主が情け容赦なく労働者を搾取するのを知っていた。政府のホームレス支援政策は、人々から生活保護を奪うごまかしにすぎないのである。一月七万円ほどの国民年金は、年配の人たちを見殺しにすることに等しいものである。一方、日本の主だった宗教は、弱者や貧しい人を助けることに何の関心もない、金儲けの詐欺にすぎず、ホームレスへの食料の施しのほとんどは、日本の小さなキリスト教徒の少数派によって与えられていたという事実から、彼は仏教と神道を恥ずべきものとして話した。

ヨシダさんにとっては、政府や他の大規模な組織の腐敗と無能力は明らかなのに、その制度に信頼を置いているのは愚か者だけだと言う。「この国には、頼りになる人間は一人もいない。自分だけで生きていくしかない」と断言した。「自分だけで生きていく」というのは、身のまわりのものは何でも利用するという意味だった。缶などのリサイクルで一月二万円から三万円の現金収入を得るかたわら、施しを求めて列に並んだり、食べ物を買ったりすることも控えることはなかった。地元のマクドナルドは、その店長が毎夜ホームレスに売れ残りを出していたので、しばらくの間は優れた食料供給所であった。しかし現在では、新しい市の条例のために、売れ残りは産業廃棄物とされてしまい、店長にはその残り物の運搬と廃棄の費用を会社に支払う義務が生じたのである。ヨシダさんは憤慨していた。

このように、ホームレスの生活そのものが次第に犯罪とみなされつつある。さまざまな規制により、公園から徐々に仮住まいが撤去され、先に見たように缶集めを禁止する条例が施行され、電車や駅から雑誌を回収し転売することに対しても取り締まりが厳しくなってきた。これは、ホームレスの自立活動を国家が違法とするパターンの一部でもある。男らしさに対する誇りは、自分の利益だけを追求することと関係がある。自立に関する政府のレトリックにもかかわらず男性がつきに見放されたとき、福祉政策に頼ることなく自分自身で生活をする試みのほとんどは、法律に触れることになりつつある。ところで、ヨシダさんにとって食べ物を買うことや施しを求めて列に並ぶことは、生活保護の申請と

は異なる活動であったことに注意したい。一見するとこれらすべての活動は、人間が自らを支えることができないことを自認する行為に見えるかもしれない。しかし、ヨシダさんにとって、レストランや店から廃棄される食べ物を回収することは、一定の努力や土地勘などを必要とするものであり、国家への依存を意味するものではない。さらに、その施しは彼が嫌悪する国家からではなく、一般市民から与えられたものであった。一方で彼は、日々廃棄される食料の山は、国家の不名誉に相当するものであると主張している。

ヨシダさんは五年前仕事を失い、それ以来ずっとホームレスだと言った。以前は豊田市近郊にある、トヨタ自動車の下請け部品製造会社で働いていたが、低賃金とパチンコなどの遊び好きが原因で、解雇されたときには貯金がまったくなかった。彼は緊張して地元の公園で夜を過ごし、小中学生たちに襲われたところを一人の心優しい老人に助けられたが、その老人は、ちよつと精神的な障害を持っていたものの、ヨシダさんにホームレスとして生き残る術を教えてくれた。この老人のおかげで、ヨシダさんは現在生活できていると語った。

ある日その老人は病気になるってしまった。入院したら、退院時に生活保護を申請するように言われた。しかし退院させられたのはちょうど五月の連休時で、福祉施設が閉まっていた。歩くのがやつとであつたけれども、緊急時のホームレス施設へ向かい、そこに連休が終わるまで滞在するように指示を受けた。連休明けから福祉施設に入所を申し込めばいいと言われた。ヨシダさんは施設までよたよたと歩く彼を助けた。しかし三日後にヨシダさんが再びその施設を訪れると、その老人は既に姿を消していた。彼の靴が残されていたことから、素足で出たようだった。ヨシダさんはそれ以来彼を一度も見えていなかった。ヨシダさんはこれを福祉当局のせいにする。生活保護を申請する際には、本人が本当に金融資産を持っていないか、またそれを与えてくれる人が誰もいないかを確かめるために幅広く身辺調査を行う。両親、兄弟、子どもたちから始まり、縁遠い関係の親戚、ヨシダさんによると親戚関係のない友人にさえも調査が及ぶ可能性がある。自立が男らしさという自己のイメージの重要な一部となっていることを鑑みると、そのような調査の対象になることに対する羞恥心が、特に男性にとって生活保護申請への大きな障害となっているのである。ヨシダさんは、世話になった老人が逃げて行方不明になった理由は、こうした生活保護申請調査に対する羞恥心にあると考えている。これ

もヨシダさんの怒りの根底にあった。

日本のいたる所で、小中学生が遊び感覚でホームレス男性を襲撃することがある。もう一人私が出会ったホームレス男性であるヒラヤマさんは、大阪城公園内で大きな堀つ立て小屋に住んでいたが、彼はもしホームレス男性が反撃しなければ、小中学生は興味を失いやがらせをあきらめると述べた。しかしヨシダさんは、それとは反対の意見であった。地元の少年たちがホームレス男性に石を投げてくるとき、彼らへの抵抗が肝心だと言った。彼自身は常にそうしてきた子どもたちはみんな臆病だから、抵抗されるといやがらせをやめる。子どもの自転車に蹴りをお見舞いしたり、あるいは彼らを後ろ手にして地元の警察署まで連行して、親との面会を求めたりした。一度、ある少年を両親の目の前で平手打ちしたことがあった。家族全体への教訓だと言った。彼は毎年夏休みが始まる直前になると、生徒たちがホームレスを攻撃しないよう忠告するちらしを地元の各小学校に回すよう警察に要請している。

ヨシダさんの不満には、彼が社会の中で公平な機会を与えられなかったという思いがあった。貧しい家庭の六人兄弟の一人として育った彼は、親が貧しいから教育は中学校卒業までだった。彼はそのことを後悔し、どうにかして勉強の遅れを取り戻し、ホームレス生活から抜け出したかった。明白な不安定さを隠すため、冷笑的で好戦的な仮面をつける男性であるという印象であった。自立と自己防衛は彼にとっての執念であるが、同時に危険な世の中で安全を確保するための一つの方法として、ホームレス男性の助け合いも強調していた。がらくたの山の近くの小屋に元郵便配達員の良き友人が住んでいて、大事な精神的な支えであった。また、新しく河川敷にやって来たホームレス男性に対してヨシダさんは助言し手助けをして、時には彼自身が拒絶した支援施設を利用するよう勧めることさえあると言っていた。筆者はそれらの施設のうちの一つを訪ね、そのPR資料のいくつかをヨシダさんに見せた。彼は利用可能なさまざまなサービスに驚き、筆者が別れのあいさつを告げたとき、彼のひねくれた感じのなかに、ある種の動揺が見られた気がした。

ヨシダさんにとって、ホームレス男性の間での相互協力の結束は、国家の福祉政策への依存に代わるものになり得るように見えた。生きる術を示した老人への彼の強い忠実性は、その感じ方の現れである。ツジモトさんが孤独な独立のなかに自分の安全性を求めた一方で、ヨシダさんはそれを仲間との友情や協力に求めたのである。彼は、そのホームレス同士の社会は純粹で自立を基にする人間関係からできていて、冷酷で退廃した主流社会と対照的であると見ていた。ここで我々は、ヨシダさんの男性性概念がなぜ国家当局に問題視されるか理解しはじめ。彼はより大きな社会の固まりに吸収されない男性の小集団での自主的な団結を理想にする。それは会社・国家に組み込みにくいもので、「企業戦士」とたとえられるサラリーマンと対照的である。男らしい自立を基にするヨシダさんのビジョンは、その国家・会社などの集団への忠実性を明確に批判するものであり、ゆえに踏みつけられがちなのである。

ニシカワさん——広い見方

最後は、ホームレス経験が何度かあって、最終的に福祉に応募することで路上生活から脱した一人の男性の事例を取り上げる。現在に至るまで何十年の間、ニシカワさんは横浜の寿町の安い宿泊所で一人暮らしをしている。彼はかつて日雇い労働で生計を立てていたが、ここ一〇年間は生活保護を受けている。ニシカワさんは家族や社会からほとんど切り離されているため、古典的なアメリカのホームレスの定義に含まれることになるが、ニシカワさん自身は自らと路上生活をjする男性との間にはつきりと境界線を引いている。彼は自らをホームレス状態から脱したものとし、機が熟したと感じたとき、ためらうことなく生活保護を申請した。彼にとって、福祉はポストモダン社会における利用可能な資源の一つにすぎない。福祉の形で彼を支援する日本政府に感謝の意を表すときがあり、福祉に頼るという意味では自立を多少犠牲にしたと認めるが、そのことが彼のプライドを傷つけることはほとんどないようである。このことは、ニシカワさんが本心に自主性・自立性を持つ人間はそもそももないと信じているためである。彼は自立したと主張する人々でも、実際はその生活は周囲の社会とからみ合っているし、その意識は周囲の文化やメディアによって条件づけられていると論じる。

一九四〇年生まれのニシカワさんは、終戦時わずか五歳ではあったが、第二次世界大戦の敗戦によって決定的な影響

を受けた多くの日本人男性の一人であった。彼は日本の占領が始まり、故郷の熊本にやってきた背の高いアメリカ兵を見たときの混乱ぶりを、いまだに覚えていと言う。幼い頃、ニュース映画で見たナチスの突撃隊と実際に町に来た巨大なアメリカ兵との差がはつきりとはわからなかった。これらスーパーマンは、ある時はヨーロッパを征服し、今回は日本を支配しに来ていた。

戦後ニシカワさんは高校に進んだが、そこでは戦争で戦った多くの教員が自分たちの手柄や受けた傷を自慢していた。戦争に負けたのに、なぜ彼らは自慢することができたのだろうか、彼は教師たちに対して抱いた嫌悪感を今でもはつきりと覚えている。高校卒業後、彼は陸上自衛隊に入隊し、最初は九州の佐世保、その後札幌に近い真駒内基地に赴任した。ニシカワさんは軍隊の完全な男社会を楽しみ、「騎士の社会」としてその生活を、感傷を交えて話す。「女性が一人もいないからこそそんな理想的な社会は可能なんだ。少なくともほんの少しの間は。もし女性がそこに入ればすぐに汚れてしまう」と語っている。ここで同性愛について語っているのではないと彼は強調した。むしろ、戦前の日本の軍事プロパガンダによく見られるテーマでもある「仲間同士の純粋な友好の共同体」を指していると彼は説明する。しかしこの完全な男社会を美化する根深い性差別の世界観を持つと同時に、戦争が終わった時期だから自分を含む日本の兵士たちが一度も参戦することはなからうという意識もあつた。彼が経験した自衛隊の生活は軍隊より「ボーイスカウトか、学校のクラブのようなもの」であつた。本当に戦う必要があれば米兵がおそらく代わりにやつてくれるという意識は深い安心をもたらすもので、安全な軍隊生活を楽しむことができた。

占領中にアメリカ人によって建設され、最近アメリカ軍の一部隊に引き渡された真駒内基地は、別な意味で征服者の男性性を印象づけた。日本の自衛隊基地よりも大きく、格好のいいアメリカの丸太小屋のスタイルでできていた。ニシカワさんは特にその広い図書室に感心していて、それは米兵の肉体の強靭さと洗練された軍事技術と調和する知性の崇高さを物語っていた。

ニシカワさん自身の証言によると、金を支払わない性行為を一度も経験したことがないという。この点において「山谷崖つぶち日記」を書いたホームレスの日雇い労働者である大山史朗(仮名)に似ている。女性に対して過度にシャイなニシカワさんは、酩酊状態にならなければ、性行為は考えられない。彼が陸上自衛隊に所属していたとき、同僚たちが時折札幌の歓楽街である薄野に誘ってくれたという。当時月給は六〇〇〇円で売春婦との短い出会いには一〇〇〇円ほどの出費が伴った。そこでまれに、酩酊状態のニシカワさんがかろうじて性交をやり遂げたとき、自分の性器に突然鋭い痛みを経験したことを思い出したという。彼が言うには、当時の薄野の女性たちは子宮内の避妊具を使っていて、それに彼の性器が挟まれたために起こったと本人は信じている。彼はこれを「プラスチック・カーテン」と呼び、男女の関係を妨害する、男女間の真実の愛あるいはコミュニケーションは基本的に不可能であることを象徴するものであつた。ニシカワさんにとって買春は女性を上回る男性の力を意味するものではなかった。逆に男性が法外な金を支払わなければならず、さらには激しい痛みまで経験しなければならぬという事実は、「日本のような母系社会では、男は女には決して勝てないのだ」と彼を痛ましい結論へと導くのであつた。学問において支配的な論説とは反対に、彼は日本を母系社会と見なし、日本人男性による暴力や無慈悲さを、女性を支配できないことへの欲求不満の表現とさえ捉えている。彼の意見はピエール・ブルデューの言葉を思わせる。「男らしさ……は、まずはじめに自己の内の女性に対する一種の恐怖心の中で、女性性に対抗するかたちでもって男性他者の前に男性他者のために構築されたきわめて相関的な観念である」というものである。多くの「日本人論」の研究者のように、ニシカワさんもまた食文化に深い意義を求める。日本とアメリカを、それぞれ魚を食べる文化、肉を食べる文化として過度に簡略化しつつ表している。日本の敗戦が、女性が支配し魚を食べる文化の国が、父系制で肉を食べる文化のアメリカと勝負を挑んだことに起因があると考えている。同世代の大多数の日本人男性のように、彼はアメリカ人の兵士が日本人女性とデートをしている様子を回想し、「その男たちはとても大きく、女たちはとても小さく見えた。我々は肉を食べる人間ではないからしょうがないです」と述べる。

陸上自衛隊除隊後のホームレスの時期は、ニシカワさんの「外人コンプレックス」に新たな歪みをもたらした。彼は、欧米のホームレス男性は、手品をしたり、バイオリンを弾いたり、ピーター・フランクルのようにいくつかの技術を保持していると考えていた。対して日本人のホームレス男性は特別な技術を持っておらず、道端で野垂れ死ぬまで、ただ

往来を歩き続けるだけである。

戦後何十年も経過するなかで、ニシカワさんは多くの本を読み、特にコリン・ウィルソンの『アウトサイダー』に影響を受けたという。現代文化の現実とフィクションのヒーローに関するウィルソンの一九五六年（日本語版一九五七年）の研究は、社会の潮流からの疎外を、人間の状況に深い洞察力を持つ人々の決定的な特徴として見る。ニシカワさん自身のアウトサイダーとしての見方から、アメリカ人の筋肉の力強さへの自分の心酔に疑問を持ち始め、一転して陰の部分に着目するようになった。アメリカの暴力犯罪に対して強烈な興味を發展させ、多くのアメリカ人大量殺人者の名前を知り、彼らの犯罪の時間、場所、状況などについて完璧に把握していたのである。これに関しても、大量殺人者研究の本を出版したウィルソンの影響があった。

ニシカワさんは、長男なのに家族の名誉となるキャリアができなかったことを恥とする感覚があった。彼には弟が二人、妹が一人いた。弟の一人が交通事故で亡くなったことを知ったときに、次のように考えた。「彼は私より一歳しか離れていなかったが、私は彼をしょっちゅういじめていた。私はたまたま長男であったので、天皇のような振る舞いをした。私はA級戦犯であった。彼が死んだ今、私は長男として彼を守るのに失敗した責任を感じた」。こういうふうにニシカワさんの胸中で、私的な問題と公的な問題が絡まっている。彼の言説は失われた男性性に対する悲しみであり、アルコール中毒の日雇い労働者でかろうじて福祉制度によって路上での野垂れ死にから救われた自分の人生は、戦後の経済的奇跡であっても払拭することができない、日本の敗戦で露呈した日本人男性の不十分な男らしさの縮図に他ならない。不十分な男らしさに対する消えることのない失望は、日本のホームレス男性の物語によく出る課題である。ニシカワさんはこれを他より雄弁に表現しているだけである。

福祉の補助を受け続けることが、必ずしも自立の形のすべてを放棄することを意味するわけではない。多くの寿町の男性は、月の初めの数日間で、生活保護のお金のほとんどを飲み代に費やしてしまい、それから再びお金のない状態に陥ることになる。ニシカワさんはそういうことはしない。アルコール中毒の生活を継続していくのに必要な一日四、五杯の安酒を月の最後の日にも購入できる程度に、一日ごとの消費を計算しながら注意深く節約生活を行っていた。二

〇一〇年に脳卒中で入院した後で、半世紀の癖をやめて禁酒生活をするようになった。最近彼は何度か熊本のご郷に帰省し、妹に会ったり学校の旧友を探したりしてきた。新幹線に乗る金がなくローカル線で三日間もかけて行くが、それでも運賃を支払わず、車掌に金を請求されたら酒に酔って意識がないふりをするという。彼の恥の感情は他の、より深刻な問題に集中している。彼にとつての自立とは、実現不可能な抽象的な理想であり、日常生活で雇い主や福祉事務所に経済的に依存することは、些細な、付随的な項目にすぎないのである。

結論——ホームレス、自立性、男性性

英語圏ではホームレスの人々を「路上ホームレス」(street homeless)もしくは英国では「rough sleepers」と「一時宿泊ホームレス」(sheltered homeless)に区別することが多い。しかし筆者が研究した男性の多くは、こういった専門用語を使わずに論じるのが難しい。日本の掘つ立て小屋の住人は、厳密には路上にいるわけではないし、シェルターのような施設にしているわけでもない。彼らの住居は手作りであるが、その多くは造りがしっかりしたものである。小規模ではあるけれど、小さなアパートと比べて遜色のないほどにスペースが確保されたものもある。小屋を法的な住所にし、郵便物を受け取っている者もある。なかには家具付き住居もあり、番犬やペットの猫を飼えるようなものもある。その多くが簡易コンロでガスを消費し、近くの消火栓や飲用噴水などから水を供給でき、車のバッテリーから電力をも供給できる事例も二、三件だけが存在した。また電力供給用のソーラーパネルが付いたホームレス男性の住宅の記録が少なくとも一件あった。

日本のホームレスの住居のデザインに対して、相当な関心が寄せられている。いくつかの美術や写真の展覧会があったし、住居の写真、スケッチ、そして解説を収録した本も数冊出ている。たとえば曾木幹太の『Asakusa Style——浅草ホームレスたちの不思議な居住空間』、坂口恭平の『〇円ハウス』、そして長嶋千聡の『ダンボールハウス』がある。これらの書籍はホームレス住宅を建築し、保存し、装飾し、そしてそれらに住んでいる男性が持つ工夫や腕前を証明す

るものである。そのデザインの技術とセンスだけでなく、生活の様子、すなわちアットホームな感じは印象的である。それらの多くが公園や河川敷に集められたとき、「村落」という雰囲気もあり、オルタナティブな共同体になっているとさえ認めざるを得ない。こうした住居に住んでいる男性を正確に表現する言葉がはたして「ホームレス」なのかどうか、誰もが考えあぐねてしまうであろう。

女性なし現金ほとんどなしの生活は、掘り立て小屋の住人たちに、多くの日本人男性がとつきの昔に失って、女性の領域と考えられているような技術の習得を強いる。多くの男性がかりうじてりんごの皮を剥けるような社会において、掘り立て小屋の男たちは自ら料理をしなければならぬ。彼らはまた、自分たちの生活空間を建設し、維持し、家具を備え、修理もしなければならぬが、これら一連のことを主流男性たちは専門家に任せている。こうして彼らは所得や財産がほとんどないにもかかわらず、また場合によっては食料配給の列に並ぶことがあつても、ある意味で大部分の男性よりも実質的には自立していると思われる。

缶集めと同様に公園居住のライフスタイルに対しても、当局は徐々に圧力をかけてきた。弾圧を正当化するには「ホームレスではない人々の公園の利用を妨げている」という（実際にそうである場合があると認めるが、ホームレス追い出しで解決しようとするのは適切なのかどうかは別問題である）。その典型的なアプローチは、一時的なプレハブ施設に小屋住まいの人々を誘い込むことである。ホトケの事例のように強制排除に協力的でない者に対して脅しをかけ、そして公園の立ち退き場所には、新しいホームレスや、施設に移った後路上に舞戻ってくるホームレスを入らせないように柵を設けたりする。このような手段で、役所はだんだんと公園内の住人を減らしてきた。曾木や坂口、そして長嶋に高く評価された手の込んだ手作りの住居は、徐々に目にするのが難しくなりつつある。

しかし自立支援制度に助けられた男性が仕事やアパートにありつける場合は少ない。皮肉なのは、かなり自立していたホームレス男性も、一度福祉施設に入れば、結局国家に依存する生活保護受給者になるか、あるいは生活保護というセーフティーネットにかからない場合、ホームレス生活に逆戻りする。後者の場合は公園のコミュニティから退去させられ、ダンボール箱での生活に戻されてしまい、以前よりもさらに絶望的なホームレスの状況を強いられることがある。

したがって、「自立支援」は、実際には男性の自立の度合いを低くしてしまうこともある。厚生労働省が出した数値によると「ホームレス」（路上・公園・河川敷など、ふつう住居とみなされないうところに住む人）の人口は、ピークだった二〇〇三年の二万五二九六六から二〇一二年一月には九五七六六へと六二パーセント減少したことを示しているが、これは主として公園内の共同体でのろろと続く消耗戦を反映している。追い出された男性たちの何人かは、おそらくまだホームレスであろうが、現在は人目を引く集団からは遠ざかってしまった。だが一番大きなホームレス人口減少の理由は、明らかに生活保護の運営が緩んだことにある。九年度でホームレス人口が一万五〇〇〇人に減ったと同時に、生活保護受給者数は一九九五年の八八万人から二〇一二年二〇五万人と倍以上に増加している。いわゆる「ホームレス人口減少」は自立支援法の快挙としてより、生活保護者倍増のわずかな一部として読むべきではないだろうか。

抑圧的にその男性を路上に放り出すか、あるいは寛容的に福祉のホステルやアパートに落ち着かせるかの方法で、一般社会は次第にホームレスの居住区域からその住民たちを締め出している。この社会的環境の中で、ホームレス男性はどのようにして自分たちの社会的地位を概念化するのだろうか？ コンネルとメッサシシュミットは、「男性性」とは「男性のある種のタイプではなく、むしろ広範囲に及ぶ行為を通じて男性が自身の身分を位置づける方法」²⁵ だと言う。どのようにしてホームレスの日本人男性は自らを位置づけるのだろうか？

筆者が話を伺った人たちは、多様で個性的な見解とライフスタイルを見せてくれたが、彼らには共通するものがある。一つは、彼らは物乞いをしないということである——そして、このことは私の経験によるとほとんどの日本人のホームレス男性の真の姿である。対照的に、彼らのほとんどはボランティアやNPOなどからの食料配布（炊き出し）を受け入れることをためらっているようには見られない。恥ずべきことは自ら助けを乞うことであり、申し出があつた助けを受け入れることではない。またこの論理は、生活保護を申請しない一部の男性が、にもかかわらず横浜の「法外援助」²⁶ として配給される七一四円の食券（パン券）のような支援を受けるために、なぜ来る日も来る日も何時間も列を作つて立っているのかの説明になるかもしれない。これらの男性の中には生活保護を申請して断られた人もいるし、自分たちが完全な生活保護ではなく、なんとか暮らせるだけのほんのわずかな助けだけを求めていると主張する者もいる。した

がつて、支援を受け入れることに関して「恥のヒエラルキー」がある。施しを乞うことは、最も軽蔑に値する男らしさを放棄した行為とみなされ、おそらくそうする日本人のホームレス男性はほんのわずかしかないであろう。物乞いは、施しをくれる男性（あるいは更に恥ずかしい場合は、女性）と比較して自分が劣つてゐることを、包み隠さずに認めることになる。それは、男性である意味だけでなく成人であることの意味でも「男らしさ」を喪失することである。物を乞うことが認められるのは子どもだけだから。そこには心理的な逃げ場はない。一方活動家や慈善事業家からの炊き出しを受け入れることは、自分から乞うことではないから屈辱はより少ない。食料を配布する人は、（大体自分より年上である）ホームレス男性を「先輩」と呼ぶことで、炊き出しは一方的なチャリティではなく世代間の協力であるというイメージを作り上げる。食券を求めて列に並んで立つこともまた屈辱的なものである。しかし、ある意味では区役所で待ち疲れることが、その行為を給料を得るための仕事と同類のものにさせるのである。生活保護を申請することは、ある人にとっては施しを乞うことと同じ程度に男らしさを捨てることのように感じられるが、一方生活保護を、不安定な労働を何十年間しても手に入らない年金と同等のものとみなす人もいる。空き缶リサイクルのような私的な経済活動は、男らしい自立という観念に沿うものであるため、政府がそのような仕事を非合法化することは特に苛立たしいものである。

こうして、日本のホームレス男性が利用しうるそれぞれの生き残り戦略は、「男性性」や「男らしさ」に異なる含意をもたすが、それは通常、国家・社会との関係で構築されるものである。本章では「男性性」と「男らしさ」という言葉を主にこの意味で使ってきた。代わつて男性性を女性との関係で構築する場合、より暗いイメージが現れてくる。本章で紹介した男性のうち、結婚生活を維持できた者は一人もいない。老後に妻、娘あるいは息子の妻に世話を受けることを期待できる者もない。ガールフレンドがいる、あるいは売春婦を相手にする余裕がある者さえ一人もない。彼らが女性との交際にあたり求めうる最高のものは、安いバーで接客するママさんの優しい笑顔なのである。この観点から見ると、これらの男性は、男らしさが不十分であることの事例にほとんど当てはまるように見える。しかし彼らは、自らを位置づけるときの手法として、女性との関係ではなく国家あるいは一般社会との関係で自身を位置づけて

いる。これはおそらくその方が、彼らにとつてより頑丈な基礎に立つことができるという理解があるためではないか。

こうした生き残り戦略に加え、ホームレス男性が社会の中で自らを位置づけるために使える物語は幾つかある。福祉システムが動き出すまでに生存の最低ラインを何とか保つという現実的なアプローチ（オガワさん）、抑圧的・寛容的な役所との妥協を堅く拒絶する（ホトケ）、一般社会から孤立したようにみえる世捨て人の生活（ツジモトさん）、一般社会への公然とした非難と、社会の片隅で生きる人々の相互的友情関係の強調（ヨシダさん）、あるいは一般社会と片隅との間の差異を些細なものにする抽象的な見方（ニシカワさん）などである。これらさまざまな戦略の共通点は、主流社会が求めるように自らを経済的に支えられない、男らしさの理想への衝撃を和らげることである。

これらさまざまな方法において、彼らは従来からの男らしさの基準に到達することができないことを説明しようとしている。彼らのうち何人かが指摘しているように、典型的なサラリーマンも、自立にはほど遠いのである。サラリーマンは、会社、上司、妻などに依存していて、自主性がそれにより制限されている。ホームレス自立支援法は、その言葉がどう響いても、ホームレス男性に対してその画一的で制限された自主性の形態（つまり、「サラリーマン」の生活ぶり）を押し付けようとする。確実にホームレスのライフスタイルへの犯罪視が続いていくにつれて、狭められた小屋とテナントの共同体が、最後の砦としての性質を帯びることになるという予想ができる。それらの居住者が徐々に追い出されていくにつれて、彼らは一般社会からさらに押し出されるか、福祉システムのなかに取り込まれるかのどちらかであろうが、そこで彼らの男性性、自立した男性という勇ましいイメージは、最終的に放棄するよう迫られていくことになるだろう。

[注]

(1) たとえば、二〇〇九年一月に行われ、同年三月九日に公表された政府の調査によると、ホームレス総人口一万五七五九人のうち女性ホームレスは四九五人で、全体の三・一パーセントにあたる (<http://www.mhlw.go.jp/bunya/seikaku/homes9/index.html>)。日本のホームレス女性について詳しく述べている Murayama (2004) でも、その割合は三パーセントである。

(2) たとえば、アメリカやイギリスでの調査では、ホームレス人口のうち、一般におよそ七〇パーセントが男性であるという結果が出ている。

- (3) Curtin (2002).
- (4) 正式名称は「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」二〇一〇年失効、二〇一二年に五年間延長決定。
- (5) Koschmann (1996).
- (6) コッパで紹介するタバコ配給の事例は現在形で書くが、二〇〇〇年代の中旬あたりの数年間にわたり集めたデータである。
- (7) Young (2003), p. 6.
- (8) 青木 (二〇〇〇年)。
- (9) Hasegawa (2006).
- (10) 二〇〇四年、神奈川県で初めて小田原市が缶集めを禁ずる条例を制定した。その二、三年後には、横浜、座間、鎌倉、茅ヶ崎、藤沢、そして平塚の各市が小田原市に続いた(林、二〇〇七年、二〇〇頁)。
- (11) パチンコやスロットマシンに興ずることのできる場所のことである。
- (12) 一八五三年に発表されたハーマン・メルヴィル著の短編小説「パートルビー」の登場人物。
- (13) 大山 (二〇〇〇年)。
- (14) 多くのホームレス男性は、自分の苗字を使用するのを避け、人に苗字などの個人的な情報を尋ねるのを控えている。フィンランド人の社会学者ユーホー・パタリは、上野公園にいた数人の情報提供者がそのことを「ホームレスのエチケット」として説明したと言った(Parri, 2008)。
- (15) ヘンリー・デイヴィッド・ソロー。一八五四年に発表された「ウォールデン——森の生活」の著者。
- (16) 二〇〇七年二月、社会保険庁は一九九七年にコンピュータシステムへの変更の際に、およそ五〇〇〇万人分の年金記録を紛失したことを認めた。ヨシダさんはこの事件を典型的な官僚のヘマとして論じていた。
- (17) ニシカワさんは、拙著 *Men of Uncertainty* で取り上げた知的な日雇い労働者である (Gill, 2001, pp. 168-70)。また、日本語でも紹介したことがある(ギル、一九九九年、三七〜四〇頁)。一番付き合ひの長い元寄せ場労働者である。
- (18) 「ホームレス状態とは、相互に連絡し合う社会構造のネットワークに入人を置くつながらりという契約の欠如や希薄さによって特徴づけられる、社会からの孤立という状況のことである」Caplow et al. (1968, p. 494).
- (19) 「私は売春婦ではない女性と一緒に寝たことが一度もない。端的にいえば、私は女性と関係をもつ、あるいは仕事をうまく処理する才能のない男である」Oyama (2005, p. 128).
- (20) Bourdieu (2001[1998], p. 53).
- (21) 東京の道端でジャグリングを披露することで知られる一風変わったハンガリー人の数学者。どうみても典型的なホームレス男性にはみえない。

- (22) 一九四六年から四八年の東京裁判で、A級戦犯は「平和に対する罪」というもつとも重大な犯罪で訴追された。
- (23) 曾木 (二〇〇三年) 一九頁、坂口 (二〇〇四年) 一八二〜八三頁。
- (24) 坂口が撮影したホームレス住宅の写真のいくつかは、彼のホームページに掲載されている (http://www.dyehouse.com/en/Zero_Yen_House/)。彼は二〇〇八年に続編である「TOKYO円ハウス〇円生活」を出版し、このなかで東京の隅田川の河川敷で偶然出会った驚くべき小屋を建てる男性を重点的に取りあげている。
- (25) 筆者が訪れた何軒かの自立支援センターで聞いたところ、その制度が想定する形で雇用と住居に「卒業」する人たちは全体の二〜三割で、二〜三年間経ってもその主流生活を維持する人は一割になるかどうかという話だった。
- (26) Connell and Messerschmidt (2005, p. 841).

【参考文献】

- 青木秀男 (二〇〇〇年) 『現代日本の都市下層』明石書店
- 大山史朗 (二〇〇〇年) 『山谷崖っぷち日記』TBSブリタニカ
- 坂口恭平 (二〇〇四年) 『〇円ハウス』リトルモア
- 曾木幹太 (二〇〇三年) 『Asakusa Style——浅草ホームレスたちの不思議な居住空間』文藝春秋
- トム・ギル (一九九九年) 『寄せ場の男たち——会社・結婚なしの生活者』西川祐子・荻野美穂編『男性論——共同研究』人文書院
- 長島千聡 (二〇〇五年) 『ダンボールハウス』ポプラ社
- 林真人 (二〇〇七年) 『生成する地域の境界——内部化した「ホームレス問題」と制度変化のローカリティ』『ソシオロジ』第五二巻第一号、五三〜六九頁
- Bourdieu, Pierre. 2001 [1998]. *Masculine Domination*. Stanford: Stanford University Press.
- Caplow, Theodor, Howard M. Bahr, and David Sternberg. 1968. "Homelessness." In *International Encyclopedia of the Social Sciences*, ed. David Sills, 494-99. New York: Macmillan.
- Connell, R. W., and James W. Messerschmidt. 2005. "Hegemonic Masculinity: Rethinking the Concept." *Gender and Society* 19: 829-59.
- Curtin, Sean. 2002. "Japanese Child Support Payments in 2002." Available at http://www.glocom.org/special_topics/social_trends/20020909_trends_s6/index.html.
- Gill, Tom. 2001. *Men of Uncertainty: The Social Organization of Day Laborers in Contemporary Japan*. Albany: State University of New York Press.

- Hasegawa Miki. 2006. *We Are Not Garbage! The Homeless Movement in Tokyo, 1994-2002*. London: Routledge.
- Koschmann, J. Victor. 1996. *Revolution and Subjectivity in Postwar Japan*. Chicago: University of Chicago Press.
- Maryama Satomi. 2004. "Homeless Women in Japan." *Kyoto Shakaigaku Nenpo* 12: 157-68.
- Oyama Shiro. 2005. *A Man with No Talents: Memories of a Tokyo Day Labourer*. Ithaca: Cornell University Press.
- Patari, Juho. 2008. *The "Homeless Etiquette": Social Interaction and Behavior Among the Homeless Living in Taiho Ward, Tokyo*. Saarbrücken: VDM Verlag.
- Wilson Colin. 1996. *The Outsider*. 福田恆存・中村隆男訳【一九五七年】『アウトサイダー』(紀伊國屋書店).
- Young, Alford A., Jr. 2003. *Minds of Marginalized Black Men: Making Sense of Mobility, Opportunity, and Future Life Chances*. Princeton: Princeton University Press.

(粟倉大輔訳)



身体と境界

Bodies and Boundaries